花材は京都・老舗の花屋、河原町三条の「花政」の主人、藤田修作氏が担当。

ダイナミックに、官能的に。夏の涼を誘う「飾花」の世界。

青竹の間では、欧羅巴人が東洋をイメージして考案したという「パゴダ」人形も。ゼンマイ仕掛けで動く様子が、エキゾチックである。

アバンギャルドかつ繊細な感覚で、独自のジャパニズムを喚起させる花師・栗崎昇氏の世界は、いつもセンセーショナルだ。その独特の美意識とセンスで、劇団四季やNHK音楽ファンタジー「カルメン」などの舞台美術から、最近ではエスクァイヤ誌で好評の茶事エッセイの連載までこなす活躍ぶり。そんな氏が「花のお勉強会」と称して主宰する「飾花の会」が7月10日、11日、国際交流会館・別館にて催された。「冷房が居座ってしまった現代では考えもつかない知恵で暮らした、昔という時をほんの束の間取り戻してみたい」との意向で、今回のテーマは涼しさの趣向。青竹に飾られた団扇絵が出迎える石段を降りた数寄屋では、表千家七代如心斎の頃に始まったという「花寄せ」を真似て、六折りの菩の屏風に夏野花を飾った「花寄せの間」、青竹に絵師・金子國義氏による団扇絵が飾られた「青竹の間」、氏が「花を生ける思いと全く同じところからの発想」というお得意のテーブルセッティング「南鐐—銀の間」の3つの間が。特に蓮華蒔絵の膳に南鐐銘々皿、ティファニーグラス、紫交趾珈琲器などを合わせたテーブルセッティングの間は、レンブ(太股の意)やパラミツ(ドリアンの一種)バナナの葉等の南洋の植物に演出されて極上にエキゾチック。「加え加えて百花繚乱の盛花を作ることは易しいが、引算を繰り返し最後の一輪を選ぶのは難しい」そんな氏の達観した思いが創りだした、スリリングな涼がそこにはあった。

ライター／端井由紀子

通り一遍の「歴史と伝統」で片肺飛行の京都BE WELLフォーラム

京都とは？ パネリストたちの情報基盤の脆弱さ。

京都に点在する大学の数々、ワンルームマンション。双方に多い年令層は20歳前後。だから京都には、彼等をカモにする店がどんどん増加する。それに伴い、京都の文化はますます活性化する。現代の京都は、常に注目される歴史的背景と共存する、日本の一都市である。まもなく京都は建都1200年を迎える。この事業の一環として、京都プライトンホテルに於いて、「京都BE WELLフォーラム～世界文化自由都市・京都ーPAXマインド～」が開催された。基調講演した山本寛斎氏は、ロシアで行ったショー「ハロー ロシア」の映像と、プロデューサーとしての現在をおおらかに語った。次いで第2部では山本氏、本誌プロデューサー御所光一郎ほか、洛中洛外からのメンバーで構成されたディスカッションが行われた。

発言のうち、主に洛外からの面々に多かった内容が伝統、文化、古都、歴史、伝承…といった歴史的側面ばかりで、今回のディスカッションで述べるべき都市としての未来は、全く触れられることはなかった。京都にとっては洛外の視点に期待し、都市計画に対する構想などが飛び出すのでは、と考えていたので残念であった。もう少し主旨をよく把握し、情報を仕込んでおいてほしかった。例えば洛中のメンバーや山本氏の発言にもあったが、京の未来、展望を語るには、歴史ばかりを重視するのではなく、現代社会として京都を見据え、そのうえ京都が京都らしく在るために、いかに時代に適応するか、その方策、感性が多大に必要なのである。今、京都は着実に、現実的に未来に向かっているのだから。

次回は9月28日、山本寛斎氏に代わり、吉本隆明氏を迎えて開催される。実のある話し合いを期待する。ただし一般公開はない。